

# 自彊前進

題字 西村直子

NO. 12 令和4年5月31日(火)

新潟大学附属新潟中学校 学校だより

文責 教頭

※ 自彊前進…自ら努め励み、前に進むこと  
(校歌3番の文言から)

## 演劇鑑賞教室から学ぶこと

昨日演劇鑑賞教室が行われ、午前に1年生と3年1組が、午後に2年生と3年2, 3組の生徒が鑑賞しました。演目は「ヘレン・ケラー〜ひびき合うものたち」で、東京演劇集団「風」による舞台でした。さすがプロの演劇集団による舞台で、皆食い入るように鑑賞していました。

演劇発表会を学校行事として、伝統的にやっている附属中学校の生徒だからこそ、学ぶべき点が多かったのではないのでしょうか？

- ・ ステージ上がシンプルで、場面転換してもステージ上のセットはほとんど変わらない。

どの場面でもステージ下手奥に階段が、ステージ下にキーアイテムの井戸がずっとありました。背景の絵は、具体物ではなく、心象を表しているかのような抽象画があるだけでした(右写真参照)。

- ・ 場面転換がとにかくスムーズでした。

時には暗転すらせず、演技を続行している後ろで大道具のセッティング等が行われていました。これにより、ストーリーが途切れず、観客にとってはとても分かりが良かったです。場面も決して多くなく、ケラー家、サリバン先生の盲学校、ケラー家の小屋の3つ程度で、限定的でした。また、場面転換の際には、BGMが流されていたのも印象的でした。



とにかくシンプルな舞台

演目全体を通して、とにかくシンプルでした。演劇は、テレビドラマや映画とは違い、具体物を用いなくとも、そこに物があるかのように演じたり、時に観客の想像力に頼ったりしながら進めるものであることがよく分かりました。

主人公ヘレン・ケラーが、視聴覚の障がいをもち、幼少時代は言葉を話すことができなかったということや家庭教師アン・サリバン先生の献身的な教育のおかげで、彼女はついには大学入学を果たすという話はあまりに有名です。しかしながら、ストーリーを知っていても、迫真の演技や効果的な演出に圧倒され、時間のたつのも忘れてしまいました。

終了後、演劇の三役を中心に、劇団の人に質問をする会が設けられました。参加した生徒たちは、矢継ぎ早に、劇団の方に様々な質問をしていました。今回の経験を、各学年、学級の演劇にぜひ生かしていきたいものです。



劇団のスタッフに質問している生徒たちの様子